

令和4年度第2回岡山県総合教育会議

日時：令和5年1月20日（金）13:10～13:50

場所：岡山県庁3階 第1会議室

【総合政策局長】

それでは、定刻となりましたので、これより令和4年度第2回岡山県総合教育会議を開催いたします。

議事進行を議長である知事をお願いいたします。

【伊原木知事】

本日は、お忙しい中お集まりいただきまして本当にありがとうございます。

本日のテーマは「部活動の地域移行」についてであります。部活動の地域移行には、地域とコミュニケーションを図り、つながりを強くしていくことが大切と考えており、行政が単独で進めていけるものではなく、学校、地域等と連携して取り組んでいく必要があると考えます。皆さまから、忌憚のないご意見を頂きたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それではまず、現状とこれまでの取組等について説明をお願いします。

【保健体育課長】

それでは、部活動の地域連携・地域移行についてご説明をいたします。資料の1ページをご覧ください。

まず、経緯等でございますが、資料の上段にありますポンチ絵の中に書かれておりますように、これまでの子どもたちのスポーツや文化活動の場の多くは、学校の部活動で確保されておりました。また、学校部活動の指導の状況は、休日を含め学校の先生が指導しており、競技の専門性を有しない先生も指導に当たっているといった状況もございます。

このような中、少子化の進行と学校の働き方改革の進展によりまして、四角の1つ目でございます。これまでと同様の部活動の維持が今後困難になってまいります。そうなりますと、子どもたちのスポーツ・文化活動のメインの場である学校の部活動が減少することが、そのまま子どもたちのスポーツや文化活動の場が減少するということとなります。

そこで、四角の2つ目、子どもたちのスポーツや文化活動の場を学校主体の取組から地域主体の取組へ移行しましょう、まずは、休日の活動からやっていきたいと思いますというのが、国が示す部活動の地域移行ということでもあります。つまり、今の学校の部活動を、そのまま土日は地域の方が担うというのではなく、子どもたちのスポーツや文化活動の場を、学校の活動ではなく地域の活動として何とか確保していきたいと思います。四角の3つ目でございますが、まずは各市町村で関係者が協議、検討するところから始めていきたいと思います。

うというものでございます。

国は、昨年12月に、平成30年に策定しておりました運動部と文化部のガイドラインを統合した上で全面的に改定し、新たなガイドラインを策定しております。その中では、これまでも示されていた学校部活動の適正な在り方とともに、新たな地域クラブ活動を整備するための国の考え方が示されております。

また、地域移行の達成時期について、検討会議からの提言では、令和7年度末が目途となっておりますが、資料の一番下の四角の囲みの中でございますが、国としては一律には定めないで、地域の实情に応じて早期に実現することを目指すというふうにしております。また、令和5年度につきましては、これまでの実践研究事業を拡充するといった連絡があったところでございます。

続いて、資料の2ページをご覧ください。

「2 本県でのこれまでの取り組み」としてありますが、(1)は、学校と地域との連携の初めの一歩ともなります部活動指導員のこれまでの配置状況でございます。(2)は、昨年度から国の委託事業を活用し、校長会あるいは中体連等の代表の方に参画をいただいて、県において委員会を設置し、これからの部活動の在り方や部活動の地域移行に係るモデル校での実践研究をしているというものでございます。モデル校といたしましては、地域移行に係る研究を、赤磐の磐梨中学校と早島の早島中学校、そして合同部活動については、高梁市内の3つの中学校で行っております。(3)では、今年度から取り組んでいる内容を3つ記載しております。

資料中段、「3 課題」でございますが、モデル校での実践研究や市町村等と情報交換する中で明らかになった課題でございます。特に、1番の関係者の理解、2番の実施主体の確保、3番の指導者の確保、そして6番の費用負担などが、毎回課題として挙げられる内容となっております。

続いて、3ページ以降は、参考として国の資料をご用意しております。3ページの上段の資料は、昨年12月に国が示しましたガイドラインの概要でございます。その中、上のほうの波線の四角の部分が、国のガイドライン策定の趣旨等でございます。そのすぐ下にある米印にありますように、中学生を主な対象としているというものでございます。

下段のポンチ絵につきましては、国が示す移行の全体像、イメージでございます。この資料の左側が今の学校の中の活動で、右側が地域でのクラブ活動となっております。左側の上の部分が、現在の学校部活動になりますけれども、これを左側の下、緑色の部分である合同部活動ですとか部活動指導員の配置によりまして、地域との連携を進めていく。さらには、右側、オレンジ色の部分になりますけれども、地域のクラブ活動への移行に取り組む、そういったイメージが示されております。

最後に4ページでございますが、このページも国が示している資料でございます。上段につきましては、地域移行に係る手順の流れのイメージ例、そして下段が地域移行に係る要素の例となっております。都道府県、市区町村、そしてスポーツ団体、さらに学校等のそれ

それぞれの役割が整理をされております。

部活動といいますと、どうしても学校で行うものというイメージがございますけれども、部活動の地域移行というネーミングで少し混乱が生じておりますが、要はスポーツで言えば、子どものスポーツ環境を学校の部活動だけに依存しないで、地域全体で何とか確保していきましょうという動きでございます。県におきましても、教育委員会と地域のスポーツ振興、文化振興を担う担当部署とがしっかり連携して考えてまいりたいというふうに思っているところでございます。

簡単でございますが、説明は以上でございます。

【伊原木知事】

どうもありがとうございました。

それでは、委員の皆さまにはどういった取組に力を入れていくべきかなど、ご意見をお聞かせいただければと思います。

【教育委員】

地域の部活に移行するというお話なんですけれども、文化部、その中でもお金が一番かかる吹奏楽部とか、楽器をたくさん扱うようなところが、地域で楽器を全部揃えとか、それから、それを保管するとかというの難しいでしょうし、そうすると、学校の中でそれを保管したり整備をしておいて、地域の方に指導にお越しいただくような、そういった、地域でやるというよりは、地域の方に学校に入ってきてやっていくという方法も必要なのかなと思います。そうすると、やはり土曜日とかの施設の管理をどうするのかとか、鍵は誰が預かるのかとか、そういったことも併せて考えていかないといけないのかなというふうに心配しております。

【伊原木知事】

そうですね、完全に手が離れるというのもなかなか難しいかもしれませんね。

【教育委員】

ありがとうございます。まさに、今の現状からすると、やっていかなければならないことではあるというふうに思うんですが、いかにして、今後、地域としっかり連携して課題を共有していくかというのが大事なんじゃないかなと思っています。今、ある意味、地域コミュニティが少し傷んでしまって、隣近所に住んでおられる方も分からないエリアがあったりとか、2ページの中にも課題の中に1つ出ているんですが、個人情報の取り扱いというようなところでいくと、例えば、町内会での連絡網が作れないとか。このことは、学校の現場においても起きていることなんです、どこのお子さんがどうしているかが分かっていないというような、この実情の中で地域に移管していかないといけないということです。

ね。なので、早くこの地域とこういった実情を共に理解し合って、学校だけじゃなくて、例えば、町内会であったり、その町内会の中での役割分担であったりというようなことの仕組みを作っていけないといけないんじゃないかなと思っています。

もう1つは、このことによって、地域間格差というんですか、例えば、都市機能であったり、そこへ住んでおられる人口であったり、専門性を有する方の人数であったり、ここでは1つ、人材バンクを活用してというような取り組みを、今実験されているわけなんですけど、子どもたちに不利益にならないような仕組みをしっかりと作っていけないというふうに思っています。

【伊原木知事】

どうもありがとうございます。

【教育委員】

部活動の地域移行に関しては本当に難しい問題で、本当に地域間格差というのがあると思うんですけど、その前に、小学校でもスポーツクラブ、ソフトテニスとか、あとバスケット、サッカーとかやっているところもあるので、そういうところに所属しているお子さんは、そのまま中学校の部活に入らずにそのスポーツクラブに行かれますし、そうでない、小学校のときに、いかに体育を好きになって運動することが大切か、それが生涯にかかわっていくということを、体育の時間で楽しいと思わせてから、それからの中学校で部活をする。それをまた地域の方でどのようにしていくかという難しい問題はあるんですけど、地域の保護者のお父さんの中には、昔、若いときにサッカーをしていた、テニスをしていたという方が、ちょっと夕方だったら入れるよというお父さん、お母さんとかも結構おられたりするので、そういう保護者間のネットワークも活用しながら、あとスポーツ店が主催するそういうクラブみたいなものとかもあるので、そういうところにもお伺いを立てながら、いかに子どもたちにスポーツを好きになってもらうか。その上で部活動をどうするかというところをこれから考えていったらいいと思います。なかなか難しい問題だと思うんですけど、そういうふうにしていけたらなと思っております。

【伊原木知事】

まだ、我々が知らないリソースが眠っている可能性は十分ありそうですね。ありがとうございます。

【教育委員】

どうしても部活動の地域移行となると、子どもたちのスポーツ環境という見方だけになるんですが、実はこれは、要するにそれぞれの地域に、大人も子どもも一緒にスポーツができる、また文化活動ができる環境を作っていきましょうということなんだろうと思うんで

す。それぞれの地域に、大人も子どもも一緒にそれができる環境があれば、そこにいる大人というのは、学校の先生もいれば、企業に勤めている人もいる。学校の先生だけがスポーツに詳しいわけじゃなくて、企業の中にも、いろんな若いころにスポーツをやってきた人もいるとすると、そういう人も一緒になって、子どもたちと一緒にスポーツを楽しみながら指導もできるようにしていく、そういう環境をどう地域に作るかということが、逆に言うと今の、子どもだけがスポーツとか文化活動をやればいいのかではなくて、生涯にわたってそれができる環境がその地域に維持されているかどうか。今はどちらかというと、部活動で囲い込むことによって、学校が地域から全部子どもたちを取り上げている環境にあります。

昔はというか、我々のころは、例えば、私はボーイスカウトとかやっていたけども、小中高で地域活動をやっていました。だけど、部活が忙しい、土日も部活をやるよというのと、地域活動はできなくなって、小学生までは地域のスポ少だとか、そういうのがあっても、スポ少も本当は中学までやれる仕組みなんだけど、部活の中で取り込むから、地域の活動はできなくなって、今、落ち込んでいる状況ではないのか。そのことによって、逆に言うと、地域でみんなで子どもたちを育てるといことも、学校に取られてできなくなっている。逆に言うと、地域に返すことによって、地域の中でこうやってみんなで子どもたちを育てていくか。これは、スポーツも文化も含め。そうすると、そこに学校の先生、当然、学校の先生も、自分の暮らしている地域に戻れば一人の大人として、そこでまた違う企業の人もいれば、農業従事者もいたりして、いろんな人が自分たちの地域をどうするのか、一緒になっていろいろ審議をすると。そういう意味でいうと、ある意味で、コミュニティーを復活させる機会にもなる。それを学校に取り込み過ぎているんじゃないのか。それを戻しましょうというような発想でやっていくと、この地域移行というものがより大きな行政としての捉え方になる。今どうしても部活の地域移行という、学校の問題を地域にどうするんだと言われると地域は困るんだけど、本当は、地域で暮らしているみんながスポーツや文化活動を、それぞれの興味によってできるような環境を作る。そういった捉え方でこれを考えていったほうがいいんじゃないかなというふうに思います。

【伊原木知事】

視点を変えると見え方が随分違ってきますね。

【教育委員】

そのことが、今、文科省がやっている社会に開かれた教育課程の実現、要するに学校を社会に開きましょう、教育も地域でやりましょうと。そのこととこの地域移行というのは、同じスタンスにつながってくるんじゃないかなという気がします。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

【教育委員】

私も、中高と部活を経験してきましたし、子どもたちも皆やっていますので、部活の魅力とといいますか、良さというものを本当に経験していますし、指導に携わってくださった方々にもものすごい感謝しています。

だから、こういうお話、すごく難しいなと、知れば知るほど、考えれば考えるほど難しいと考えております。部活は、特に中学生のころは、みんながやるものだというふうに、現役のころは思っていました。ですから、部活は教育活動の一環だとずっと思っていたんですけど、実は教育課程外だということも、恥ずかしながら課長の説明を聞いて初めて認識した次第ですし、だから課外活動というんだということも、やっと認識できた程度です。

先ほど申し上げましたように、いろんな教育的効果があるわけですので、地域移行して、その効果がそこで肩代わりできるのか、担保できるのかということころは、しっかりチェックしていく必要があると思っています。

息子の部活を横で見えて、いろいろ良い経験をさせてもらいました。例えば、学校の授業には出られないけれども、部活は来て、学校を卒業して兵庫県の高校に進学したというような同級生がいたということも聞いています。顧問の先生から、家に行って声をかけなさいということで、同学年の人たちが順番にその子の家に行って声をかけるというような活動をしていたそうです。いろんな生きる力といいますか、人間力みたいなのを高める場になっていますので、そういった部分はしっかり継承していってほしいと思います。

指導員の質の保障、量の確保、このあたりはしっかり取り組んでいく必要があると思っています。特にパワハラとか体罰とか、そういうブラックなイメージがどうしても付きまとうこともありますので、そういったところをしっかりと払拭していく努力はとても大事になってくると思いました。

あと町内会の話もありましたけれども、私が住んでいる町内も大分役員さんが高齢化していまして、若返りができないというような、そういう問題を抱えているところも少なくないと思いますので、そういった部分もしっかり検討していく必要があるのではないかと思います。

【伊原木知事】

ありがとうございました。経験に基づく貴重なお話、ありがとうございました。

【鍵本教育長】

部活の地域移行がなかなか難しいというのは、いろんな難しさがあるんですけども、1つは地域によって実情が違うということがあります。岡山、倉敷のような大都市であると、実際、部活がうまくいっているわけですから、あまり切迫感はないんですけども、中山間に行きますと、サッカー部に入りたいけどサッカーできないとか、ブラスバンドやりたいんだけど

れどもフルメンバー揃わないという中学校が当たり前のようにあって、現在の状況であっても、部活がやりたいことができないという子どもたちがたくさんいる。そういうところにあっては、例えば、合同することによって一つのかたちができる。そこに地域の方が入ってくるということは、これはあるのかなというふうには思っていますけれども、そういう難しさというのが1つあるのと、それから、地域移行という言葉はかなり一般的にはなってきたんですけども、ここに1つの難しさ、理解の難しさがあって、学校にある部活動を誰か面倒見てもらえませんか、さっき課長が少し言いましたけど、そういったふうに捉えておられる方がまだたくさんおられる。ニュースなどを私が見ていてもそういう書きぶりが結構ありますが、それは違います。さっき言ったように、運動ができないような環境だと子どもたちが困るので、地域の中にスポーツができる環境を作っていきましょう。だから、この部を誰か持ってくれませんか、このサッカー部を誰か面倒見てくれる人いませんかというのを探す活動ではないということが、なかなかご理解いただけない難しさがあるのかなというふうに思っています。

これからすべきことは、1つは、地域の中に本当にどんなリソースがあるのかということ、まだ教育委員会でも完全に把握できていないので、そこをしっかりと、今、各市町村教委にお願いしているんですけども、どういった場があって、どんな人が手助けをしてくれて、どこで活動できるのか、それが一緒にできる場所なのか、あるいは指導に来てあげるよというところなのか、いろいろ違うと思うので、今、それを把握するように努力しながら、国の動向もありますので、そこはしっかりと見極めていきたいと思っております。

【伊原木知事】

ありがとうございました。

ぐるっと一通りお話をお伺いだけで、私自身も大変勉強になりました。私自身も、先ほど教育長が言われたように、何か地域移行というときに、地域で誰が引き受けてくれるんだという、何か探すというイメージ。町内会がちょっと高齢化しているからというの、たぶん似たようなことで。本当に今、町内会が受け皿になるのだろうかとか、そんないい人がいるのだろうかと探すんじゃなくて作っていくんだという、これで随分印象が違ってくるのかなと。

あと、そもそも日本の部活というのは、ある種、磨き上げられた、日本のすごい誇るべき文化のような気がするんですけども、その我々にとっての当たり前が、本当に当たり前なんだろうか、これが絶対なんだろうかというのは、これを機会にいろいろ考え直してもいいのかもしれない。確かに、強い学校なんて土日練習するのは当たり前、休んだのはお正月だけとか。いやいや、あの人はお正月も休んでませんよみたいな話を聞くんですけど、実を言うと、トップアスリートの中で、週に1日は休まないとリセットできないから、どんどん練習の効率が下がってパフォーマンスが下がるんですよという人がいるのは私知っています。私、ほかの国をいろいろ知っているわけじゃないんですけど、アメリカだと、結構シー

ズンスポーツで、いやいや私はアメフトと水泳を両方やっているんです。寒い時期はこれやっていて、暖かい時期はこれやってるんですというのが結構普通。それもすごいいい選手まで、いやいや、それが実は役に立つんですと。渋谷日向子選手が、ソフトボールをやっていたのがすごく役に立ったと言っているみたいなもので、1つのものだけ土日も含めてずっとやっているよりも、何か切り替えて別のことをやったり、週に1回は頭をリセットして体を休めたほうが実は、みたいなこともあったりするということを考えると、ちょっと毎日面倒を見てくれと言われるとえらい大変だけれども、少しハードルが下がったりするかもしれないなど。

また、教育長が言われた、ついつい自分の周りのこと、今こんなにうまくいっているのになんでそれを崩すんだと。それは、その人から見るとそういうのが見えているし、別のところでは、いや今、成立していないので、これはなんとかしないといけないですよと。もし、岡山県全域ですごくうまくいっていて、誰も文句言っている人がいないのであれば、これはたぶんわざわざそんなリスク取ってやることでもないんですけど、今、回っていないところが結構あって、しかもその数が少子化で増えることが予想されるよねと。しかも、今がものすごい先生の自己犠牲の上に成り立っていて、先生方が悲鳴を上げていますよねということからすると、地域移行が難しい、もしくは課題が幾つも挙げられるから、我々はもう立ち止まっているというわけにもいかないんだろうな。でも、すぐ3年間で全部やりましょうというのなかなか難しそうですよ、どう見ても。

ちょっと最後に。昔、よくインターナショナルと言われていたものが、最近はグローバルというふうに使われて、インターナショナルの場合は、国が前提になって、日本だけで完結せずに、アメリカとも韓国とも付き合おうよ。グローバルだと、あまり国は意識されていなくて、世界のどこでもということ。委員が言われたような、小学校のスポーツクラブからそのまま上がる場合は、最初からあまり学校を意識せずにグローバルみたいな感じで、これがもうできるような地域、できるようなスポーツのタイプであれば、それはある種、話が早いです。今、非常に学校がすごく存在感がある。でも、チームが1つの学校でつくれないときには、インターナショナルじゃないですけど、まず学校対学校で、2つもしくは3つの学校が話し合ってチームを1つ作りましょう。グラウンドはここで、もしくは順繰りでやりましょうみたいな。あまり地域というよりも、学校間取決めみたいなことで。これは本当に教育長が言われたことに戻るんですけども、地域の実情に応じて、もしくはそのスポーツ、学校の状況に応じて、段階的に、今よりは適切なやり方を見つけていくというので見渡してみて、良い例があれば広げていくという、そういうことなんだろうなというふうに思います。簡単ではないけれども、そのままじっとしているよりも、事態が悪化しているのを傍観しているよりは、いろんな工夫で、子どもたちのスポーツの場を確保していくという非常に大事なことに向かって、何とか進んでいくというかたちかなと思いました。

その議論を前提に、ちょっとこう思ったとか、ここは忘れないようにしたいとかということがありましたら。ぐるっと回す時間があるかどうか分からないので、手挙げ方式でお願い

したいと思います。

最後の締めは、教育長にさせていただくと終わりがきれいかなと思っていますので、それまでに何かありましたら。

【教育委員】

先ほど言っていたように、スポーツとかを通してということなんですが、お子さんによっては部活動が生きがいだという方もいっぱいいらっしゃるわけですよね。勉強の中ではうまく自分が活躍できないけれども、部活動だったら自分が人よりもちょっと輝いていられる、自己肯定感を保てるという場があるわけですよね。だから、不登校のお子さんでも部活動だけは行くという方も、結構、私の経験でもたくさんいらっしゃるし、それがあから非行に走らずに何とかやっつけていけるというお子さんもたくさんおりましたから、やはり部活動の心理的効果というのは、すごく今までも良かったから、地域移行と言われてみんなが慌ててしまうわけですよね。

でもそれは、さっき言ったチームを作るのに、1つの学校では足りないから他校とも連携してやりましょうとか、地域の方にも入っていただきましょうというかたちにするのであれば、見てもらう大人の目とか周りの目が増えるし、仲間も増えるという意味においては、小さな学校の中のコミュニティーでは生きづらい人も、別の場で生き生きできる場ができるというふうには肯定的な意味で見ればいいかなと。

ただ、今まで学校の先生が、この子やんちゃだから、ちょっとこれやらせておこうとか、勉強の指導ではうまく話をしてくれないけど、部活のときだけは話してくれるから、そのときにちょっと進路のこととか生き方について話そうとか、そういう時間が持てたのを、先生でない地域の方がどこまでやってくれるのかなというのはちょっと心配です。やはり、良い方ももちろんたくさんいらっしゃるでしょうけれども、どこまで地域の方が、そういった今までやっていた、先生たちが担っていた心理教育の部分を担ってくださるのかなというのはちょっと心配だなと思っていて、研修制度もできるようなんですけども、そういったところに心理教育みたいなものも盛り込んでいただいて、自己肯定感を高めるとか、非認知能力の話であるとか、そういったところも地域の方に伝えていけたらよりいいのかなというふうには感じています。

【伊原木知事】

確かに、心配は心配ですね。

【教育委員】

もう1つ気になったことが。

地域の方をお願いするのはいいんですけど、営利目的に利用されるのも心配だなと思っていて、子どもたちを利用して、自分のお店を儲けさせようじゃないですけど、そういうふ

うに別の利用の目的にされるのも心配だなと思っていて、それも今、気になっているところ
です。

【伊原木知事】

あまりあからさまなところだと困っちゃいますよね。

【教育委員】

本当は、好きなスポーツが全部できる環境があればいいんでしょうけど、それはやっぱり
全ての地域にというのは難しさがある。

【伊原木知事】

現実的にね。

【教育委員】

でも、自分が置かれた環境の中では、ある程度選択肢があるとかというのは必要なだろ
うなと思います。

それから、本当にトップを目指すような人と、スポーツを楽しむ人では結構やり方が違う
ので、その辺は逆に言うと少し振り分けて考えて、私は部活の地域移行、学校の施設という
ものは、する施設として、場所としての学校というのは、今後も使えるような状況は必要な
んだろうと思うんです。

【伊原木知事】

学校以外にどんどん造るとするのは、ちょっと現実的には考えられない。

【教育委員】

学校にあるスポーツができる施設、これを授業が終わった後は地域に開放して、子どもた
ちも地域の大人も一緒に楽しむところを作っていくと。例えば、企業でも、早く帰って自分
の暮らしている地域の学校へ行って、子どもと一緒に楽しめよとか。例えば、私の会社でも、
土日が仕事の中心だとすると、平日休みの社員もいっぱいいるわけです。そういう社員が、
自分が休みの日は、夕方の時間は学校へ行って、子どもたちと一緒にスポーツをしながら指
導もできるよとか。私の会社でも、高校で甲子園へ行ったような社員だっているわけで、普
通の企業にもたくさんいるから、おそらくスポーツをやりたいとか、それなりの指導理論を
学んだ人も民間企業にもいっぱいいると思うんです。そういう人も、学校を開放してくれれ
ばやってもいいよと、自分が楽しみながら。そういうことはやれる。そうすると、地域の人
も楽しめるし、子どもたちも楽しめるとか。

ブラスバンドにしても、例えば、中学生ぐらいと大人と一緒にやったっていいし、ジュニ

アオーケストラなんかもそうですよね。小学生ぐらいから大学生ぐらいまでと一緒に音楽をつくることだってできるんだけど、部活だというふうになってしまうとできない。でもそれをやると、子どもたちも音楽に親しみながら楽器の演奏もできるという、そういうふうなことで、地域にそういうスポーツとか文化をみんなで楽しむ。その仕掛けを学校という施設を使いながら、学校の施設は、教育機関と地域コミュニティーのシェアリングをしている施設としてフルに使えますよというような、その管理体系をどうするかみたいなことができてくれば、かなりいろんな活用ができるんじゃないかなと思います。

【伊原木知事】

最後、鍵本教育長。

【鍵本教育長】

ありがとうございます。まさに、いろいろ出たご意見が、我々も心配しておったり、大事なポイントかなと思います。先ほど、委員がおっしゃった学校の教員にとっても、地域移行の心配な部分というのは、それで子どもとしっかりつながっている部分というのも確かにありますし、それでいろんな多様な子どもたちをつなぎ留めている部分というのも確かにあって、それを地域に任せるときに、あと学校としてどうそれをカバーしていくのかという心配があるというのも事実でありまして、そこはしっかり考えていかないといけない。それは、学校側の問題として、そこは考えていかなきゃいけないと思います。

それから、知事がちょっとおっしゃった、多様な経験といいますか、アメリカの例を挙げられましたけれども、今日の新聞にも室伏長官がコメントされていました。中学校段階で1つの競技を毎日する必要はないと書かれていました。さまざまな体験をするいい機会じゃないかというようなことも言われていました。スポーツの世界でトップに立たれた方がこういう経験をされていて、この段階でこのスポーツだけというのではなくて、いろんな選択肢を考えてみるというのもいい機会なのかなと。あるいは、一生懸命それだけやりたい子もいると思いますので、それはそれでいけばいいのかなと思います。

現実的には、どこからどう始めていくのかというところもあるんですけど、1つ思うのは、先ほど少し言いかけましたけども、人口減少が大変進んだ地域は、まさに現実の問題として部活をどうするかという問題があるので、そこで先ほどお話があった合同クラブ化していくことによって、それは最初は、いわゆるA中学校とB中学校とC中学校が一緒になって1つのチームを作っていく。当然、最初の段階では教員がそこに関わっていく。いわゆる部活動の中の話ですけども、そこはやがてその地域の、例えば先ほどおっしゃったような、会社でお休みの方が加わったり、地域の方が加わって膨らんでいって、場合によっては、地域のほうで進めようかという話になってもいいと思います。実際、高梁でやっている今の取組は、吉備国際大学の野球部の大学生が協力してくださって、そしてそういうかたちが出来上がっているというところもあります。

ただ、これはどこでもできるのかというところでもないので、地域に合ったかたちでやりながら、さっきのスポ少の延長でいけるならそれもあるでしょうし。ですから、これで全部やりましょうというのではなくて、できるところからやっていく。さらには、困っているところからやったほうが、たぶん現実味が一番あるのかなと思っているので、そういったかたちで、いろんな取組を紹介し合いながら、どんなことができるのかというのを考えていくということが、これから大事なのかなというふうに思っています。

【伊原木知事】

どうもありがとうございました。

大変短いながらも有意義な議論ができたと思っています。なかなか簡単ではないんですけども、これなのかということは別として、部活動については何らかの対策をとっていかねば、本当に子どもたちのためにならないと思っています。ぜひいろいろ工夫をしながら、一步一步進めていただければいいんじゃないかと思っています。どうもありがとうございました。

では、時間となりましたので、総合教育会議をこれで終了とさせていただきます。